

元総社蒼海遺跡群(138)

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2020.3

前橋市教育委員会

元總社蒼海遺跡群(138)

前橋都市計画事業元總社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 2 0 . 3

前橋市教育委員会

はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる群馬県の県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、2万年前から人々が生活を始め、市内のいたる所にその息吹を感じられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中心地として栄えました。また、続く律令時代になってからは總社・元總社地区に山王廃寺、国府、國分僧寺、國分尼寺など上野国の中核をなす施設が次々に造られました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた肥橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地となり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する元總社蒼海遺跡群（138）は古代上野国の中核地域の調査であり、上野国府推定地域にも近接することから、調査成果に多くの注目を集めています。今回の調査では、国府そのものに関連する遺構の検出、確認はかないませんでしたが、国府衰退後、中世のこの地に栄えた蒼海城の堀跡等が検出されました。蒼海城は、県内最古級の城と考えられており、その縄張りは近年の発掘調査に伴って、徐々にその姿を見せていますが、全貌は未だ確認されていません。残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進められることができました。また、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

令和2年3月

前橋市教育委員会
教育長 塩崎政江

例　　言

1 本報告書は前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う元総社蒼海遺跡群（138）の埋蔵文化財発掘報告書である。

2 発掘調査および整理事業の体制は下記のとおりである。

遺跡名	元総社蒼海遺跡群（138）（前橋市遺跡コード：1 A 249）
遺跡所在地	群馬県前橋市元総社町2137-1、2140、2144、2145-1、2150-1、2152、2153-1、2153-3
監理指導	並木史一（前橋市教育委員会）
調査担当	前田和昭（技研コンサル株式会社）
調査員	茂木佑輔（技研コンサル株式会社）
発掘調査期間	令和元年12月16日～令和2年1月6日
整理事業期間	令和2年1月7日～令和2年3月27日
調査面積	702 m ²
発掘調査参加者	芦川良紀 新井 實 上沢公一 宇賀神光 岡 真 北爪二郎 後藤次雄 塙野谷和夫 清水隆二 高橋一巳 乗附敏男 ニッホウ正雄 星野正也 増田 静 整理作業参加者 大川明子（技研コンサル株式会社） 安藤三枝子 川野京子 木暮朱実 杉田友香 立川千恵子 田所順子 平澤小夜子 細野竹美

3 本書の編集は前田が行い、原稿執筆はIを並木史一（前橋市教育委員会）、他を前田が担当した。

4 本書における図面・写真・遺物は、前橋市教育委員会文化財保護課で保管している。

5 下記の機関にご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します。

山下工業株式会社

凡　　例

1 挿図中に使用した北は座標北である。

2 揿図に国土地理院発行1/200,000『宇都宮』『長野』、1/25,000『前橋』、前橋市発行1/2,500都市計画図を使用した。

3 遺構名称は、堅穴住居跡：H、道路跡：A、溝跡：W、土坑：D、ピット：Pである。

4 遺構・遺物実測図の縮尺は原則的に次のとおりである。その他各図スケールを参照されたい。

遺構　堅穴住居跡・井戸・土坑・ピット・その他・・・1/60　全体図・・・1/300

遺物　土器・石製品・・・1/3、1/4　鉄製品・・・1/2　古錢・・・1/1

5 本文および表中の計測値については（ ）は現存値を、〔 〕は復元値を表す。

6 遺構・遺物実測図のトーン表現は以下の通りである。

遺構　焼土範囲：■　灰範囲：■　遺物　須恵器（還元焰）：■　施釉：■

7 主な火山降下物等の略称と年代は次の通りである。

As-B（浅間B軽石：1108）、Hr-FP（榛名二ッ岳伊香保テフラ：6世紀中葉）、

Hr-FA（榛名二ッ岳洪川テフラ：5世紀末～6世紀初頭）、As-C（浅間C軽石：3世紀後葉～4世紀前半）

目 次

はじめに

例言・凡例

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	2
III 調査の方針と経過	8
IV 基本層序	8
V 遺構と遺物	
1 溝跡	10
2 ピット	11
VI 発掘調査の成果と課題	12

挿図目次

Fig. 1 遺跡の位置	1	Fig. 7 黄海城掘振り想定図	12
Fig. 2 前橋の地形	2	Fig. 8 W-1号溝	13
Fig. 3 周辺遺跡図	3	Fig. 9 W-2・3・4号溝、ピット群（1）	14
Fig. 4 周辺調査地点とグリッド設定図	7	Fig.10 W-5号溝、ピット群（2）	15
Fig. 5 基本層序	8	Fig.11 ピット群（3）	16
Fig. 6 調査区全体図	9	Fig.12 出土遺物	16

表目次

Tab. 1 周辺道路一覧表	4	Tab. 3 出土遺物観察表	12
Tab. 2 ピット計画表	11		

写真図版目次

PL. 1 遺跡の位置（2011年撮影 上が北）	東端調査区全景（西から）
遺跡周辺の旧状（米軍撮影USA-R1250-109 上が北）	PL. 5 W-2号溝全景（南西から）
PL. 2 調査区全景（上が西）	W-2号溝全景（南から）
PL. 3 W-1号溝全景（東から）	W-2号溝A-A'（南西から）
W-1号溝全景中段部全景（東から）	W-3号溝全景（南から）
W-1号溝全景中段部全景（西から）	W-3号溝A-A'（南から）
中央調査区全景（東から）	W-4号溝全景（南から）
W-5号溝全景（東から）	ピット群西側全景（北から）
PL. 4 東端調査区全景（上が北）	ピット群東側全景（北から）

I 調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴い実施され、21年目にあたる。本調査地は、周辺で埋蔵文化財調査が長年にわたって行われていることから、遺跡地であることが確認されている。

令和元年8月26日付で前橋市長 山本 龍（区画整理課）（以下「前橋市」という。）より試掘確認調査依頼が提出された。これを受け、前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）で同年11月7日に試掘確認調査を実施した結果、遺構が検出され、工事計画から遺構の現状保存は困難であると判断したため、記録保存を目的とした発掘調査実施に向けて協議を進めた。

令和元年11月22日付で前橋市より、埋蔵文化財発掘調査・整理業務に係る依頼が、市教委に提出された。市教委では既に他の発掘調査を実施中のため、市教委直営による調査実施が困難であると判断し、民間調査組織へ発掘調査業務を委託することで合意に至った。業務実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に則り、市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することとなった。同年12月6日付で前橋市と民間調査組織である技研コンサル株式会社との間で業務委託契約が締結され発掘調査に着手した。

なお、遺跡名称「元総社蒼海遺跡群（138）」（遺跡コード：1A249）の「元総社蒼海」は土地区画整理事業名を採用し、「（138）」は過年度に実施した発掘調査と区別するために付したものである。

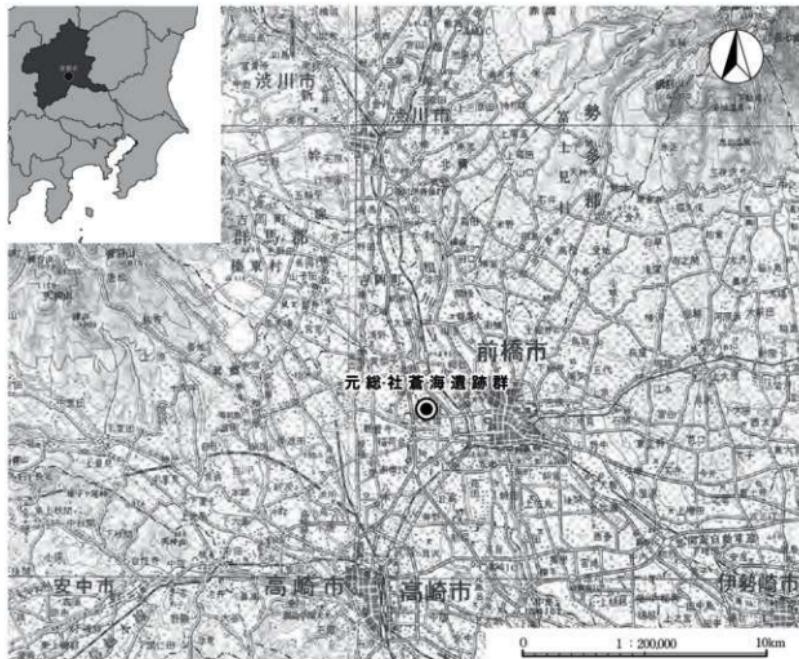


Fig. 1 遺跡の位置

II 遺跡の位置と環境

遺跡の位置 (Fig. 1) 元総社蒼海遺跡群 (138) は、前橋市

街地から利根川を隔て西へ約 3.6km の地点、前橋市元総社町地内に所在する。遺跡地の西側には関越自動車道が南北に、南側には国道 17 号、主要地方道前橋・安中・富岡線が東西に、また東には市道大友・石倉線が南北にそれぞれ走っている。

本遺跡は、榛名山山麓の相馬ヶ原扇状地端部と前橋台地との移行地帯に立地する。遺跡周辺には、相馬ヶ原扇状地の伏流水を水源とする牛池川、染谷川が流れている。これらの河川の開拓作用によって細長い微高地と低地が多く形成されており、その比高差は 3 ~ 5m を測る。遺跡が立地する周辺は主に畑地として利用されていたが、前橋市中心部から続く市街地の西端にあたり、近年では元総社蒼海土地地区画整理事業の進展によって宅地や商業施設が立ち並び、市街地化が拡大している。

歴史的環境 (Fig. 3・Tab. 1) 本遺跡が所在する元総社地域は、上野国府推定地や上野国分寺・国分尼寺を中心に連続と遺跡が広がる地域であり、関越自動車道建設や区画整理事業などに伴う発掘調査が行われ、多くの遺構が確認されている。本遺跡周辺地域における時代毎の遺跡の概要は以下の通りである。

(1) 繩文時代 八幡川右岸の微高地上に産業道路東 [15] ・

産業道路西 [16] 、本遺跡の立地する牛池川右岸台地上に上野国分僧寺・尼寺中間地域 [22] ・元総社小見三遺跡 [59] ・元総社蒼海遺跡群 (24) などが挙げられ、堅穴住居跡が確認されている。本遺跡でも縄文時代前期から中期にかけての遺構を確認している。

(2) 弥生時代 日高遺跡 [18] [19] ・上野国分僧寺尼寺中間地域 [22] ・正觀寺遺跡 [21] などがあるが、その分布は散在的である。この内、日高遺跡では浅間 C 軽石下の水田跡が確認されており、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて継続して営まれた水田と捉えられている。

(3) 古墳時代 本遺跡周辺は県内でも有数の古墳密集地域であり、それを代表するものとして總社古墳群が挙げられる。古墳時代後期・終末期に亘り、王山古墳 [7] ・總社二子山古墳 [12] ・愛宕山古墳 [10] ・宝塔山古墳 [13] ・蛇穴山古墳 [8] などの首長墓が多数築造された。また、この時期には山王庵寺 [4] が建立され、總社古墳群を含め、政治的中枢地域となる。

山王庵寺は昭和 3 年に日枝神社境内が「山王塔址」として国指定史跡となり、その後昭和 49 ~ 56 年にかけて 7 次にわたる本格的な発掘調査が行われた。この調査で金堂の検出および「放光寺」範囲の平瓦出土により山王庵寺が「山ノ上碑」「上野国交替実録帳」にみられる「放光寺」であることが有力視されるようになった。平成 9 ~ 11 年の調査でも土坑から大量の塑像が出土し、平成 18・19 年度調査では北・東・西面、平成 20 年度調査では南面の回廊を検出している。さらに平成 21 年度調査では「推定中門」と「西側南側回廊」の周辺部が、平成 22 年度調査では北西隅の回廊と接するように「基壇建物跡」と「北方建物群」が確認されている。なお、この寺の塔心礎や石製鰐尾、根巻石等の石造物群は宝塔山古墳の石棺や蛇穴山古墳の石室と同系統の石造技術によ



Fig. 2 前橋の地形

地図出典：地図出典：前橋市地図

地図出典：前橋市地図

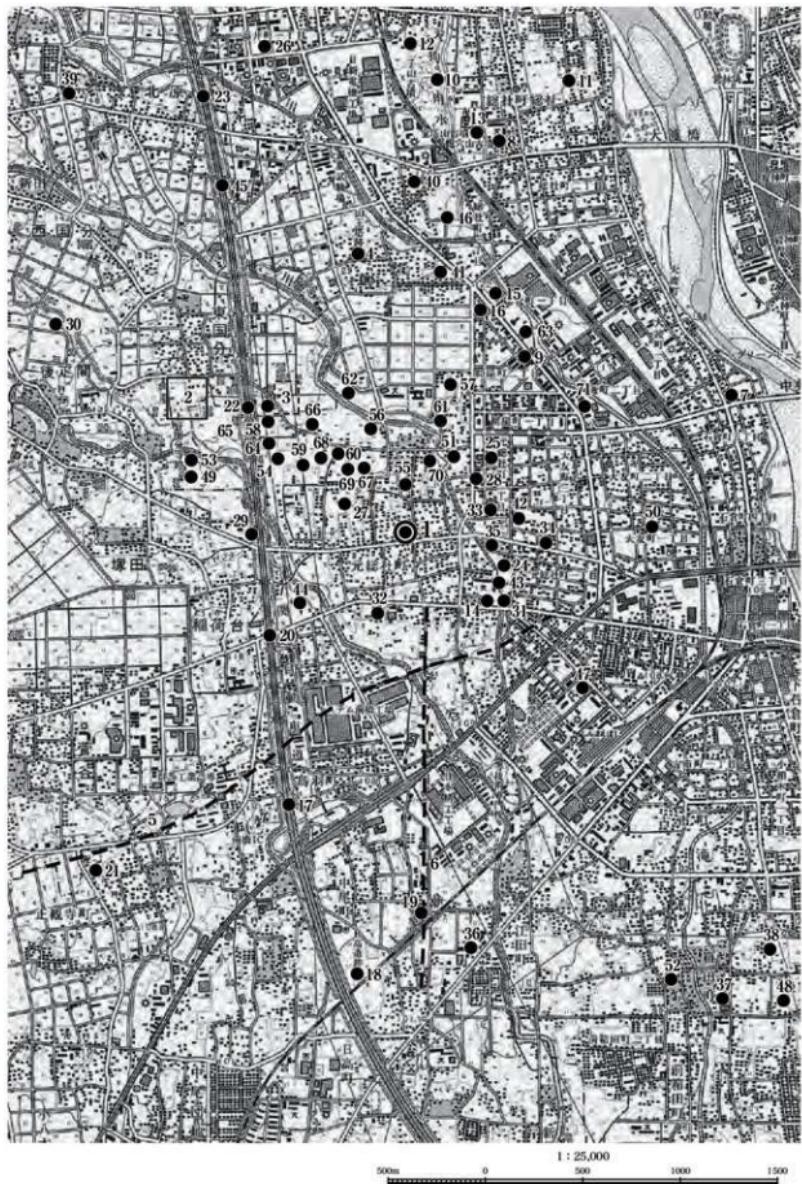


Fig. 3 周辺遺跡図

るものと考えられており、仏教文化と古墳文化が併存しながら機能していた様子が窺える。

この時代の集落は牛池川と染谷川に挟まれた台地上に展開しているが、前期～中期の集落は散見される程度で、後期からの集落増加が看取できる。生産域としては、牛池川左岸一帯に広がる低地平野において、元総社明神遺跡、元総社北川遺跡、総社閑泉明神北IV・V遺跡などで水田跡が確認されている。

(4) 奈良・平安時代 奈良時代には上野国府が造営され、上野国分寺〔2〕・国分尼寺〔3〕の建立に示されるように、本遺跡周辺は古代の政治・経済・文化の中心地として再編成される。

上野国府は本遺跡付近の区域に約900m四方に推定され、関連遺跡として元総社小学校校庭遺跡〔14〕では県下最大級の掘立柱建物跡が検出され、元総社蒼海遺跡群〔99〕、上野国府等範囲内容確認調査28・33・34トレントでは掘込地業を持つ建物跡が、元総社蒼海遺跡群〔95〕では方形の柱穴掘り方をもつ大型掘立柱建物跡が確認されている。元総社寺田遺跡〔43〕では「國府」・「曹司」・「國」・「邑尉」などの墨書き器や人形が出土している。元総社明神遺跡〔24〕では南北方向の溝跡、閑泉橋遺跡〔25〕や元総社蒼海遺跡群〔7〕・〔9〕・〔10〕では東西方向の溝跡が確認され、国府城の外郭線の想定が為されている。また、周辺遺跡からは円面鏡や縁釉陶器、巡方（腰帶具）なども出土しており、国府を考える上で貴重な資料となっている。

国分僧寺は大正15年に国指定史跡となり、昭和40年代から部分的な発掘調査が進められるようになった。昭和55年以降には本格的な調査が始まり、主要伽藍の礎石・塼垣・堀等が確認されている。また、平成24年度から28年度にかけての第2期発掘調査において、これまでの金堂が講堂であったことが判明する等、伽藍配置の変更が行われている。国分尼寺は昭和44・45年のトレント調査により伽藍配置が推定され、その後平成12年度に前橋市埋蔵文化財発掘調査團により南辺での寺域確認調査が行われた。調査の結果、南東・南西隅の塼垣と、それに平行する溝跡や道路状道構等が確認されている。また、高崎市教育委員会による平成28年度の調査で講堂跡が尼坊跡であったことが判明し、平成29年度の調査では回廊跡の一部が確認されている。関連遺跡としては鳥羽遺跡〔20〕で神社遺構と工房跡が確認され、上野国分僧寺・尼寺中間地域〔22〕では大規模な集落・掘立柱建物跡群が検出されている。また、近郊にはN・64°・E方向に東山道（国府ルート）が、日高遺跡〔19〕では幅約4.5mの推定日高道が国府方向へ延びると推定されている。

当該期の一般的な集落は、古墳時代と同様に牛池川と染谷川に挟まれた台地上に立地するが、国府推定域の中心部での分布は少なく、国府城と居住域の区分けが看取できる。近年の調査による元総社蒼海遺跡群〔40〕で8世紀後半の住居跡内の一角に鍛冶遺構が検出されている。元総社蒼海遺跡群〔41〕では9世紀後半の鍛冶工房が検出され、同遺跡からは金の付着した灰釉陶器や奈良三彩といった貴重な遺物が出土している。また、元総社蒼海遺跡群〔64〕では8世紀前半には廃絶されたと考えられる製鉄炉跡（箱型炉）が1基、元総社稻葉遺跡〔47〕では10世紀に想定される製鉄炉跡（小型自立炉）が2基確認されている。

(5) 中世 室町時代になると上野国守護上杉氏から守護代に任命された長尾氏が蒼海城を本拠地としこの地を治めた。元総社蒼海遺跡群では蒼海城の堀跡が多く検出されており、12～15世紀の青白磁梅瓶、青磁酒会壺、袴腰香炉などの貿易陶磁が多数出土している。天正年間以降は諂訪・秋元氏が蒼海城に入り当地の領主となるが、慶長6年（1601年）に秋元長朝が総社城に移ると同時に蒼海城は廃城となつた。また、当該期の周辺遺跡では大渡道場遺跡〔71〕の貨幣理納遺構から572枚におよぶ銭貨が捲紐を通した「縛」の状態で六糸出土している。

Tab.1 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	元総社北川遺跡〔138〕	11	牛池山古墳	21	正統今井跡 ～一帯	31	寺井古墳
2	上野国寺子跡	12	相模二山古墳	22	上野国分御寺・尼寺中間地域	32	火神古墳・金森跡
3	上野国寺子跡	13	文政古墳	23	火神古墳	33	寺井古墳・金森跡
4	牛山古墳	14	大村町牛子町相模御	24	正統相模御跡 ～一帯	34	寺井古墳
5	高石墓（確定）	15	東武鉄道相模原駅	25	相模御跡	35	高石古墳
6	高石墓（確定）	16	東武鉄道相模原駅	26	相模古墳・金森跡	36	鶴川古墳
7	牛山古墳	17	中臣遺跡	27	豆作古墳	37	村前古墳
8	蛇穴山古墳	18	日高遺跡	28	閑泉古墳	38	吉川川古墳
9	福寿山古墳	19	日高遺跡	29	東洋町相模原駅	39	相野分寺跡・Ⅱ・Ⅲ遺跡
10	幸谷山古墳	20	日高遺跡	30	元定通跡 ～Ⅰ	40	村前古墳
							50 大丸七地氷遺跡

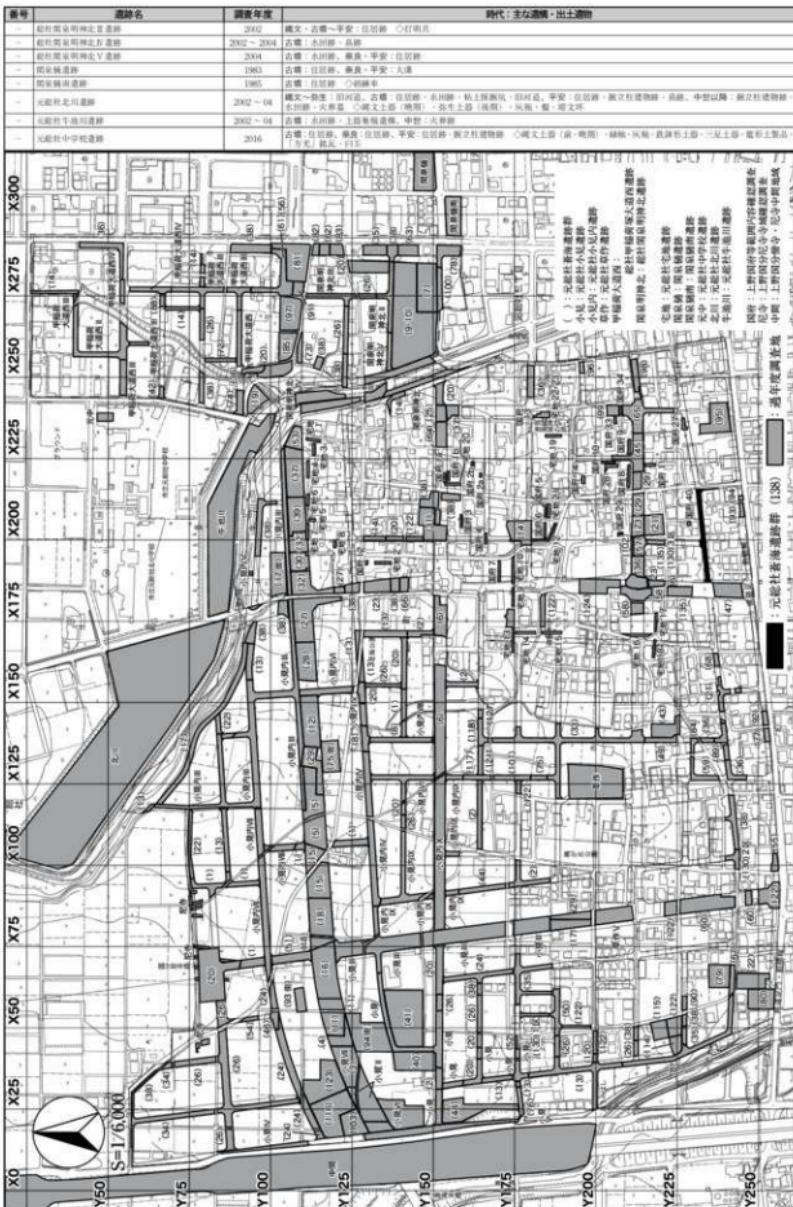


Fig. 4 周辺調査地点とグリッド設定図

III 調査の方針と経過

1 調査範囲と基本方針

委託調査箇所は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業地内であり、調査面積は702m²である。グリッド座標については国家座標（日本測地系第IX系）X = 440000.000, Y = - 72200.000を基点とする4mピッチのものを使用し、経線をX、緯線をYとして北西隅を基点に番付して呼称とした。各調査区の公共座標は次のとおりである。

測点 日本測地系（第IX系） 世界測地系（第IX系 測地成果 2011）

X 206, Y 232 X = 43072.000 m, Y = - 71376.000 m X = 43426.914 m, Y = - 71667.766 m

発掘調査は遺構確認面まで重機（0.45m³バックホー）にて表土掘削を行ない、排土の運搬は2tダンプを用いた。掘削の後に遺構確認、遺構掘り下げ、遺構精査、測量・写真撮影の手順で実施した。遺構調査については土層の堆積状況を確認するため、土層ペルトを適宜設定した。なお、出土遺物に関しては、遺構に伴うと判断したものはNo.遺物とし、他の覆土中の破片等については一括遺物として取り上げた。

遺構の記録には、図面作成はトータルステーション・電子平板を用いての測量・編集を行なった。記録写真は35mmモノクロ・リバーサル、デジタルカメラの3種類を用いて撮影し、調査区全景撮影についてはドローンでの撮影を実施した。

整理作業における出土遺物の計測は、キーエンス社製3Dスキャナー（VL-300）による機械計測を主体とした。

2 調査経過

元総社蒼海遺跡群（138）の発掘調査は、初めに西側の表土掘削を令和元年12月16日から17日まで行った。調査範囲が宅地に挟まれた東西に細長い形状であることから、想定遺構面までの深さに対して調査区壁面が法面等を確保できない箇所については掘削を行っていない。特に調査区中央付近については、住宅に近接しており、部分的に土留めがされている状態であった。明らかに周囲の構造物に影響を及ぼす可能性が高い箇所についても、監督員と協議のうえで、掘削を行わなかった。蒼海城の堀についても同様に、安全面を考慮して深さ2mで掘削を中止し、部分的にトレーナーで深堀を行った。表土掘削に並行して遺構確認作業を行い、12月16・17日の両日には西側調査区において検出した蒼海城堀跡の断面撮影・測量を行った。12月18日から19日まで、調査区中央から東側にかけての表土掘削を行ったうえで、20日より人力による遺構調査を開始した。調査と記録・測量を並行して作業し、12月24日に全景撮影を行った。当日中に記録作業および確認調査を実施した後、翌25日より調査区の埋め戻しと並行して撤収作業を行い、令和2年1月6日に現地での発掘調査を終了した。

令和2年1月7日より本格的に出土遺物・図面・写真等の整理作業および報告書作成を実施した。

IV 基本層序

調査区周辺の現況は、比較的平坦な地形となっている。表土掘削の結果では、遺構確認面である総社砂層の直上層は造成土となっていることから、旧来の地形は改変されたと考えられる。また、調査区西側の蒼海城東西堀を検出した地点は、住民から「オグラッポリ」と呼ばれる窪地が以前は存在した。戦後すぐの航空写真では農地となっていることから、宅地化が進むにつれて、平夷化が進んだと考えられる。基本層序は、調査区東側のW-2号溝付近にて記録した。



Fig. 5 基本層序

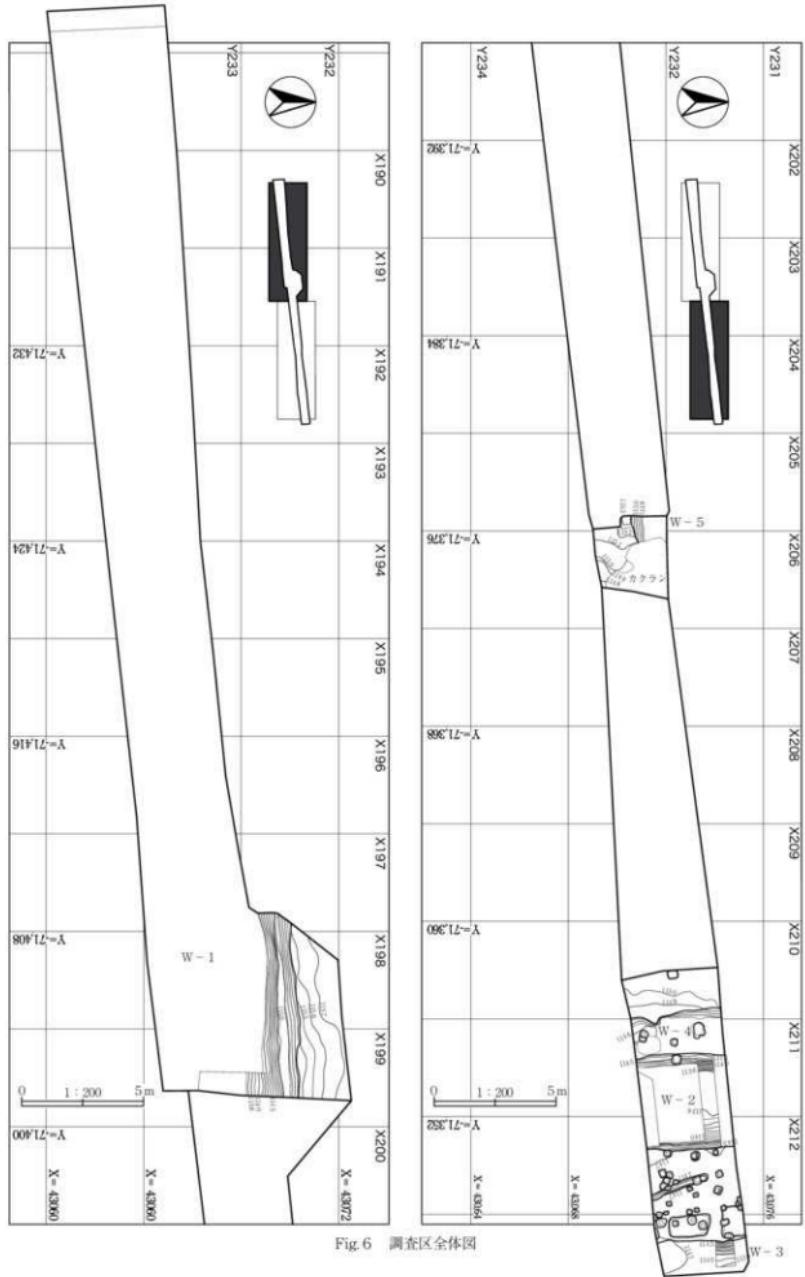


Fig. 6 調査区全体図

V 遺構と遺物

1 溝跡

W-1号溝跡 (Fig.51、PL.21)

位置 X 188～199、Y 232～235 主軸方向 N-88°-E 規模 長さ(44.77)m、上幅(5.57)m、深さ(1.97)m、西側調査区からの検出で、計画道路隅切部のみに北面の立ち上がり部が検出した。他の地点はいずれも調査区内は堀覆土中となっていたことから、規模・形状については判然としない。また、安全上の観点から、掘削深を2mに留めたために、底面は検出されていない。調査区西端部においても部分的にバックホウによる深堀を行ったが、確認できなかった。北側立ち上がり部では、幅0.59～0.92mの走り状の中段が検出した。別遺構の可能性も検討したが、本遺構と同一走向で覆土の観察においても埋没過程は同時と判断できることから、本遺構の範疇とした。現地表面から1.19mの深さまでは、上位に碎石を含む新しい土層で下層は湛水により土壤が灰褐色に変性し、鉄分沈着が認められた。このことから、本遺構が埋没後、現代の宅地化が進む以前の状態は庭地であったと考えられる。 形状等 全体が検出されていないため不明。 重複 無し。 出土遺物 無し。

時期 蒼海城の二の丸南面を区画する堀と考えられる。出土遺物がないために明確な時期については不明。

W-2号溝跡 (Fig.51、PL.21)

位置 X 211、212、Y 231、232 主軸方向 N-5°-W 規模 長さ(3.59)m、上幅4.19m、下幅2.07m、深さ1.50m、東端調査区の中央より検出した。南北方向は調査区外となる。覆土上面は搅乱土を含む表土層が直接被覆していることから、本来はより大型であったと考えられる。覆土の下半は、肌理の細やかな黒色土とシルト質の褐色土が互層に堆積し、東に向かって傾斜する状況となっている。底面は砂層となっていることから、空堀であったと考えられる。 形状等 逆台形。 重複 W-4号溝、ピット群と重複し、新旧関係はW-4号溝・ピット群→本遺構である。 出土遺物 無し。 時期 蒼海城の造築に伴う堀と考えられるが、出土遺物が無いために明確な時期は不明。 W-1・3号溝とは明らかに覆土が異なるため、時期に差異があることが想定される。

W-3号溝跡 (Fig.51、PL.21)

位置 X 213、Y 231・232 主軸方向 N-4°-W 規模 長さ(3.86)m、上幅(1.33)m、深さ(0.76)m、東端調査区東側より検出した。南北方向は調査区外となる。現道と埋設物の関係で、平面プランとトレンドによる西側立ち上がり部の確認に留まった。 形状等 検出範囲が狭いため不明。 重複 無し。 出土遺物 無し。

時期 蒼海城の本丸から二の丸東面を区画する堀と考えられる。出土遺物がないために明確な時期については不明。

W-4号溝跡 (Fig.51、PL.21)

位置 X 210・211、Y 231・232 主軸方向 N-5°-W 規模 長さ(3.86)m、上幅(1.89)m、深さ0.44m、東端調査区西側より検出した。 形状等 検出範囲が狭いため不明。 重複 W-3号溝、ピット群と重複し、新旧関係は本遺構・ピット群→W-2号溝である。ピット群との明確な新旧関係は判然としない。 出土遺物 無し。 時期 蒼海城の造築に関連する溝と考えられるが、出土遺物がないために明確な時期については不明。 W-2号溝と同一走向を示していることから、関連性が窺われる。

W-5号溝跡 (Fig.51、PL.21)

位置 X 205・206、Y 231・232 主軸方向 N - 88° - E 規模 長さ (1.13) m、上幅 (1.47) m、深さ 0.53 m、中央調査区西側より検出した。上面および東側は擾乱により大幅に削られている。底面は非常に硬化し、南側立ち上がり部との境は、側溝状に僅かに低くなっている。覆土は總社砂層ブロックを少量含む、粘性の強い黒褐色土が堆積している。形状等 逆台形。重複 無し。出土遺物 覆土下層より須恵器高台付壺 (1) が出土している。時期 出土遺物より9世紀後半以前と想定される。備考 検出範囲が狭小のために判断しかねる点もあるが、道としての使用も考慮にいれる必要がある。なお、周辺の調査事例から7世紀末段階と想定されている西傾地割に伴う区画溝、東から蒼海 (95) W-2・3号溝、国府47トレンチ2・3号溝、蒼海 (130) 2区W-2号溝、蒼海 (60) C区W-1号溝とは、規模・形状が似ているもの同一ライン上ではない。

2 ピット (Fig.52・53・84・85、PL.21～23)

東端調査区より、ピット37基を確認している。時期は出土遺物が無いために判然としないが、重複箇所においては蒼海域の掘であるW-2号溝より古いといえる。W-2・3号溝間から検出されたピット群は、建物形状の復原は適わなかったが、W-3号溝に近い傾きで柱が通っており、さらに数回の建替えが行われたことが想定される。計測値については「Tab. 2 ピット計測表」を参照のこと。

Tab. 2 ピット計測表

遺構名	位置	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	平面形状	断面形状	出土遺物	備考
P-1	X 213, Y 232	0.44	(0.18)	0.55	—	階段状	—	
P-2	X 213, Y 232	0.23	(0.18)	0.14	—	台形状	—	
P-3	X 213, Y 231・232	0.41	0.36	0.15	方形	V字状	—	
P-4	X 212・213, Y 232	0.26	0.25	0.13	円形	台形状	—	
P-5	X 212・213, Y 231・232	0.21	0.16	0.14	長方形	台形状	—	
P-6	X 213, Y 231	0.24	0.24	0.16	方形	台形状	—	
P-7	X 213, Y 231	0.36	0.36	0.84	円形	U字状	—	
P-8	X 212・213, Y 231	0.24	0.22	0.16	円形	弧状	—	
P-9	X 212, Y 231	0.20	0.19	0.72	方形	台形状	—	
P-10	X 213, Y 231	0.37	0.35	0.37	方形	台形状	—	
P-11	X 213, Y 231	0.35	0.23	0.62	長方形	漏斗状	—	
P-12	X 213, Y 231	0.35	0.30	0.47	長方形	漏斗状	—	
P-13	X 232, Y 231	0.23	0.23	0.13	方形	台形状	—	
P-14	X 212, Y 231	(0.24)	0.16	0.14	長方形	箱状	—	
P-15	X 212, Y 231	(0.22)	0.21	0.27	漏斗状	—		
P-16	X 212, Y 231	0.36	0.36	0.55	方形	U字状	—	
P-17	X 212, Y 231	0.32	0.30	0.60	方形	U字状	—	
P-18	X 212, Y 231	0.23	0.22	0.28	方形	漏斗状	—	
P-19	X 212, Y 231	0.31	0.25	0.11	方形	V字状	—	
P-20	X 212, Y 231	0.36	0.34	0.48	方形	漏斗状	—	
P-21	X 212, Y 231	0.22	0.20	0.10	方形	台形状	—	
P-22	X 212, Y 231・232	0.27	0.20	0.07	椭円形	台形状	—	
P-23	X 212, Y 231・232	0.29	0.29	0.09	円形	台形状	—	
P-24	X 212, Y 231	0.29	0.27	0.21	円形	台形状	—	
P-25	X 212, Y 231・232	0.29	0.27	0.22	方形	台形状	—	
P-26	X 212, Y 231・232	0.34	0.33	0.11	方形	弧状	—	
P-27	X 212, Y 231・232	(0.38)	(0.34)	0.09	円形	弧状	—	
P-28	X 212, Y 231	0.25	0.19	0.06	方形	弧状	—	
P-29	X 212, Y 231	0.24	0.20	0.05	方形	V字状	—	
P-30	X 212, Y 231	0.24	0.20	0.08	方形	弧状	—	
P-31	X 212, Y 231	0.33	(0.13)	0.12	階段状	—		
P-32	X 211, Y 231	0.39	0.38	0.52	円形	箱状	—	
P-33	X 211, Y 231	0.31	0.28	0.37	方形	漏斗状	—	
P-34	X 211, Y 232	0.29	(0.26)	0.25	袋状	—		
P-35	X 211, Y 232	0.34	0.30	0.26	方形	漏斗状	—	
P-36	X 210, Y 231	0.45	(0.35)	0.13	長方形	弧状	—	
P-37	X 211, Y 231	0.66	0.47	1.19	不規則	箱状	—	底面は褐色色移層に達する。

Tab. 3 出土遺物観察表

W-5

No	出土位置	種別	形態	口径	底径	高さ	地土	焼成	色調	基形、成・無形、文様等の特徴	現状状況・備考	
1	W-1	高石面高台付近	筒瓦	384	35	32	石英、長英石、 基、長石系輝石	半千難波層	灰白	内面コリナゲ、体部下部3割ヘケタゲ、先端2割を切り落し、高石面付近 内面コリナゲ、外・内側に漆喰付着。	2-1現存。	
遺構外												
No	出土位置	種別	形態	高さ	幅	石材	焼成	色調	重量	基形、成・無形、文様等の特徴	現状状況・備考	
1	中央遺跡付 近	石質	23.9	36.0	11.8	西門左室付近	-	-	1500	上部は竹口式、残りは丸頭式が混在し、壁面は「S」字形 を描く。側面は切削した手での削除を有する斜面があり、 底面は「V」字形である。	一部、 現存。	
No	出土位置	種別	形態	口径	底径	高さ	石材	焼成	色調	重量	基形、成・無形、文様等の特徴	現状状況・備考
2	中央遺跡付 近	石質	23.0	34.6	16	主武門	-	-	720	上部は竹口式、残りは丸頭式が混在し、壁面は「S」字形 を描く。側面は切削した手での削除を有する斜面があり、 底面は「V」字形である。 「V」字形は開口部、側面は斜面。	2箇所、 現存。 現存。	

VI 発掘調査の成果と課題

今回の調査では、蒼海城の堀跡3条を検出した。二の丸南面を区画する堀は、周囲の縄張りと「蒼海城絵図」によれば、西隣の松井屋敷から東隣の瀬下豈後屋敷にかけて直線的に築かれたと当初想定されていたが、調査の結果では、二の丸がより南側に張り出す形状で堀が検出した（W-1号溝）。W-3号溝は城の主郭東面を区画している堀で、本遺跡では範囲およびトレンチによる立ち上がり部の検出に留まったが、北側に位置する蒼海（29）1区W-2号溝の調査においては、推定幅10m以上、深さ4m程度としている。これら2条の大型堀に対して、二の丸南面東隅から検出されたW-2号溝は、絵図に該当する堀が記載されていない。出土遺物がないために新旧関係が不明瞭ながら、同じく二の丸内から検出された蒼海（21）27地点W-2号溝・（23）24地点W-5号溝は15世紀後半と想定されている。これに重複した新段階の堀として、弧状の平面形態が丸馬出の可能性を想起させる蒼海（21）27地点W-3号溝、（23）24地点W-6号溝がある。蒼海城の絵図は現在3種が残っている。絵図の年代については慎重に検討しなければならないが、城は様々な要因によって、主を変え、それぞれの目的により形態を変化させる。その時代性を考慮しながら、今後も検討していただきたい。

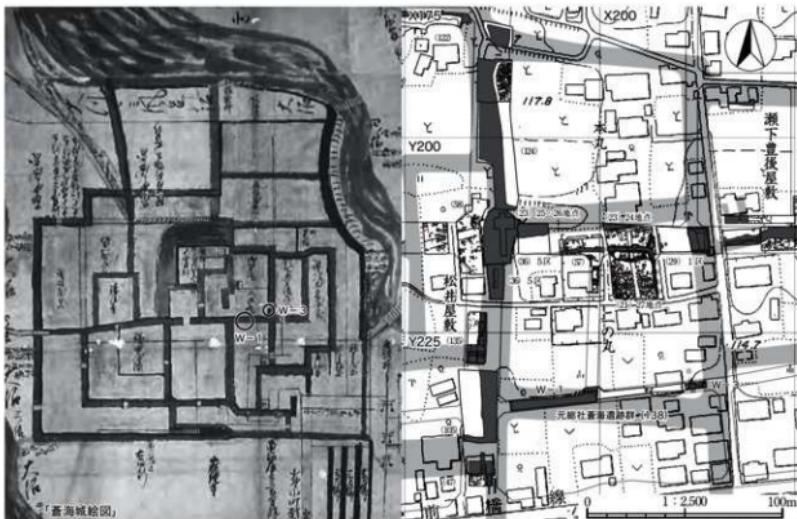


Fig. 7 蒼海城縄張り想定図

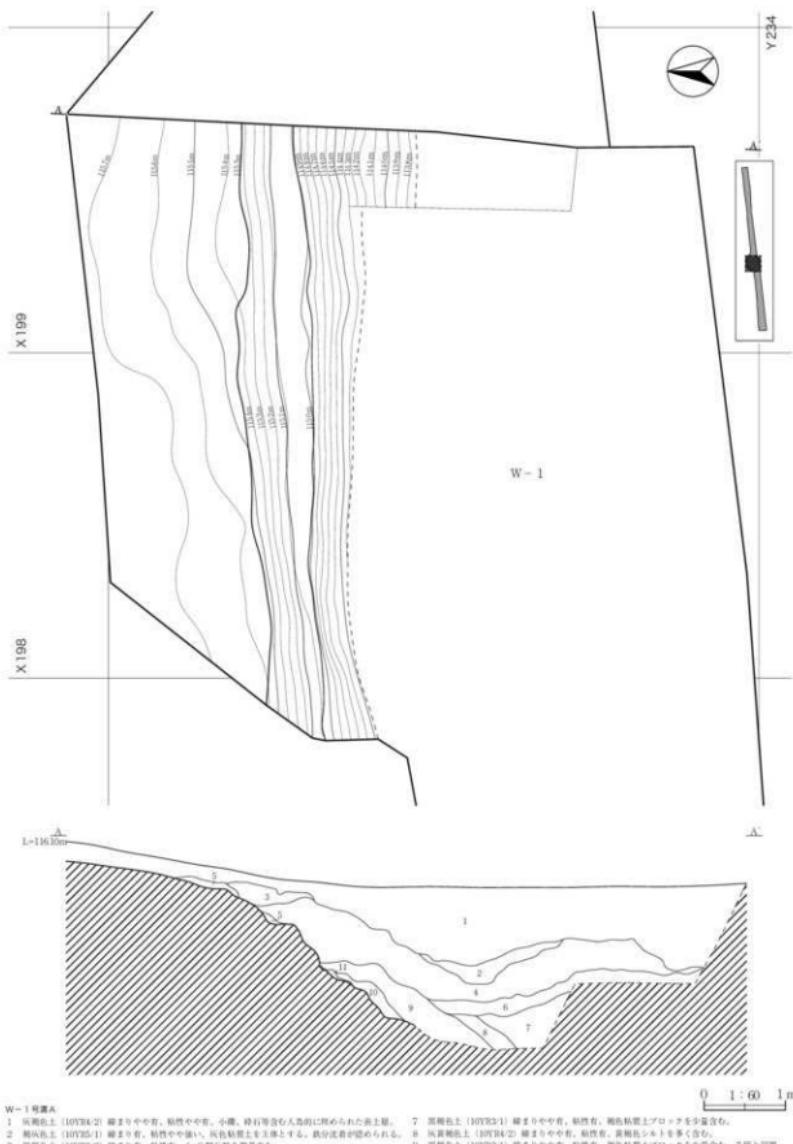
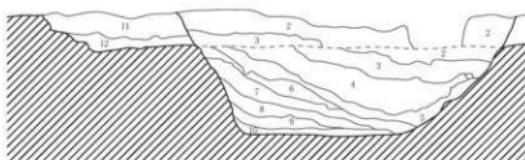
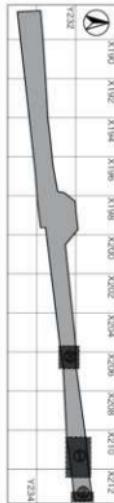
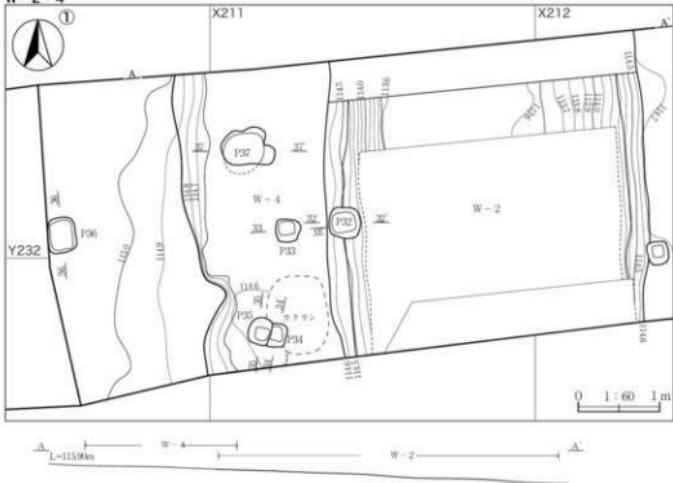


Fig. 8 W-1号溝

W-2・4

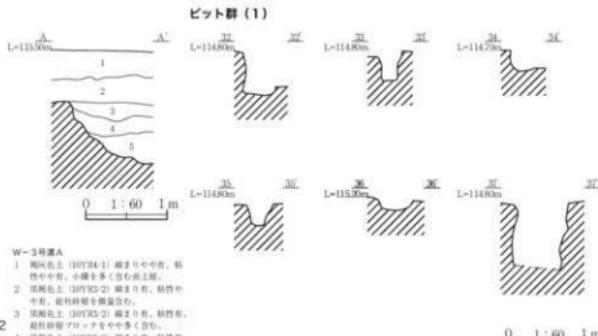
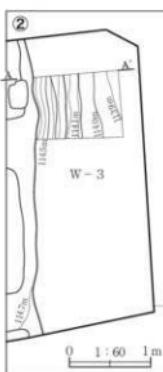


0 1:60 1m

W-2・4号溝

- 黒褐色土 (10YR4/1) 線まりやや有。粘性やや有。小塊多く含む光土層。
- 黒褐色土 (10YR3/2) 線まり有。粘性やや有。粗粒母質を含む。
- 灰褐色土 (10YR5/2) 線まりやや有。粘性やや有。小砂やかな鉄分富む。
- 黒褐色土 (10YR3/2) 線まりやや有。粘性やや有。粗粒母質ブロックを多く含む。
- 灰褐色土 (10YR5/2) 線まりやや有。粘性やや有。粗粒母質ブロックを多く含む。
- 灰褐色土 (10YR5/2) 線まりやや有。粘性やや有。粗粒母質ブロックを多く含む。
- 灰褐色土 (10YR4/2) 線まりや有。粘性やや有。シルト質の粗粒母質やや多く含む。
- 黒褐色土 (10YR4/1) 線まりやや有。粘性や有。シルト質の粗粒母質を含む。
- 灰褐色土 (10YR5/2) 線まりやや有。粘性やや有。シルト質の粗粒母質を多く含む。
- 黒褐色土 (10YR3/1) 線まりやや有。粘性やや有。粗粒母質やや含む光土層。
- 灰褐色土 (10YR4/2) 線まり有。粘性やや有。粗粒母質を含む。
- 灰褐色土 (10YR4/2) 線まりやや有。粘性やや有。粗粒母質を多く含む。

W-3



W-3号溝A

- 黒褐色土 (10YR4/1) 線まりやや有。粘性やや有。小塊多く含む光土層。
- 黒褐色土 (10YR3/2) 線まり有。粘性やや有。小砂やかな鉄分富む。
- 灰褐色土 (10YR5/2) 線まりや有。粘性やや有。粗粒母質を含む。
- 黒褐色土 (10YR3/2) 線まり有。粘性やや有。粗粒母質ブロックを多く含む。
- 灰褐色土 (10YR4/2) 線まりやや有。粘性やや有。粗粒母質ブロックを多く含む。

Fig. 9 W-2・3・4号溝、ピット群 (1)

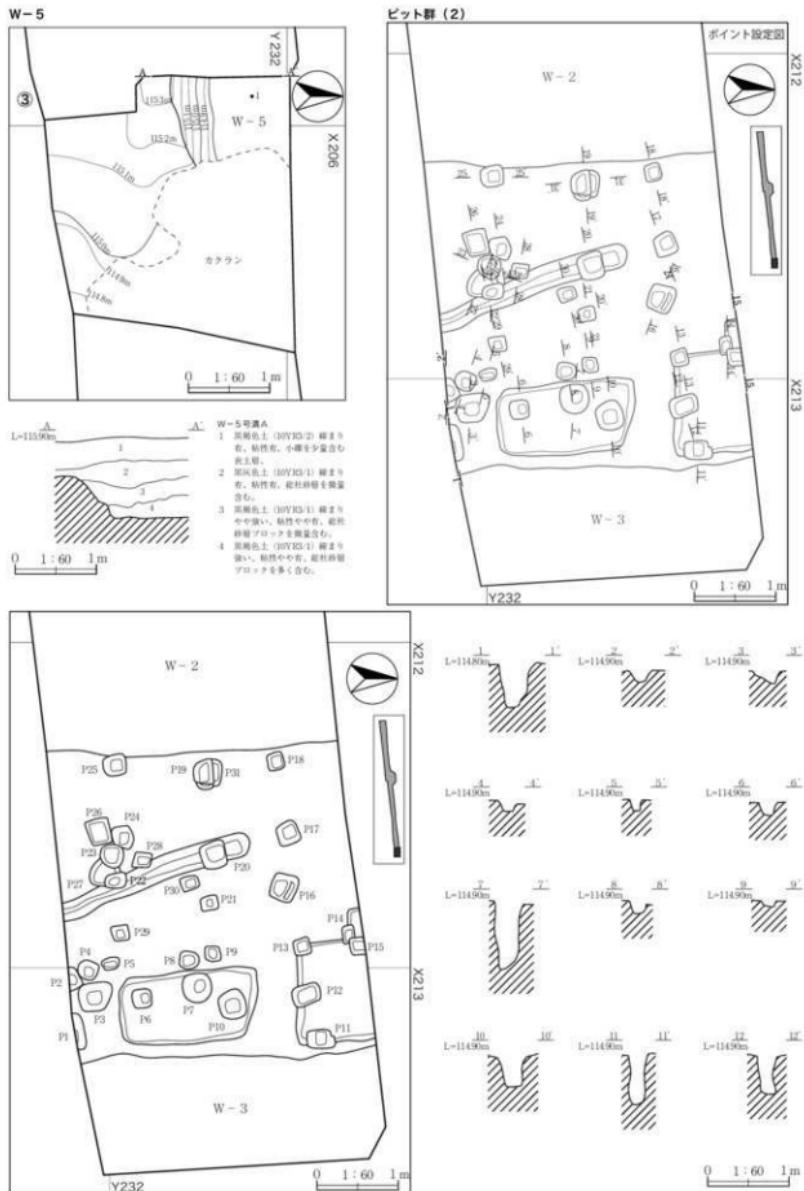


Fig.10 W-5号溝、ビット群 (2)

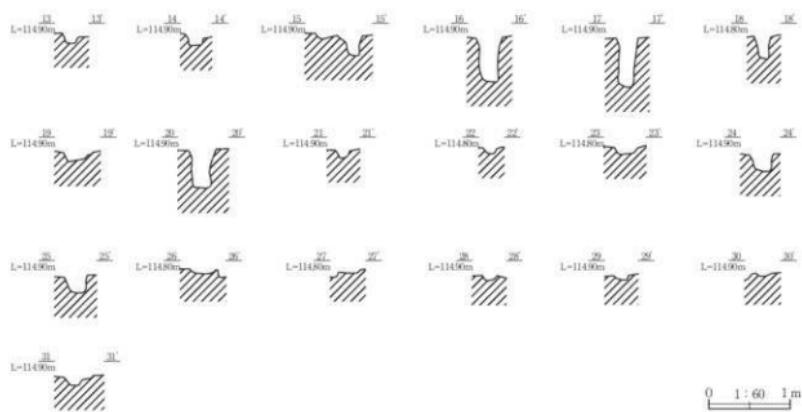


Fig.11 ピット群 (3)

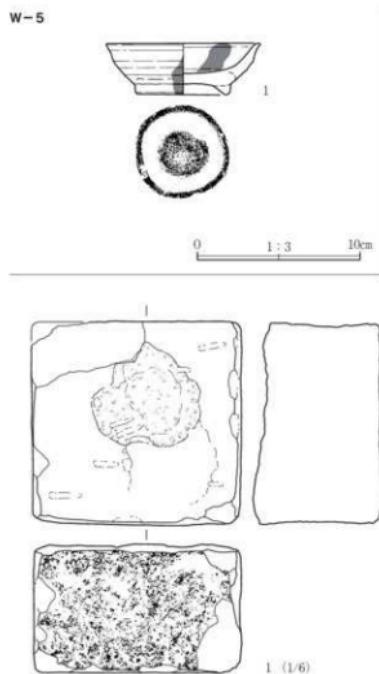
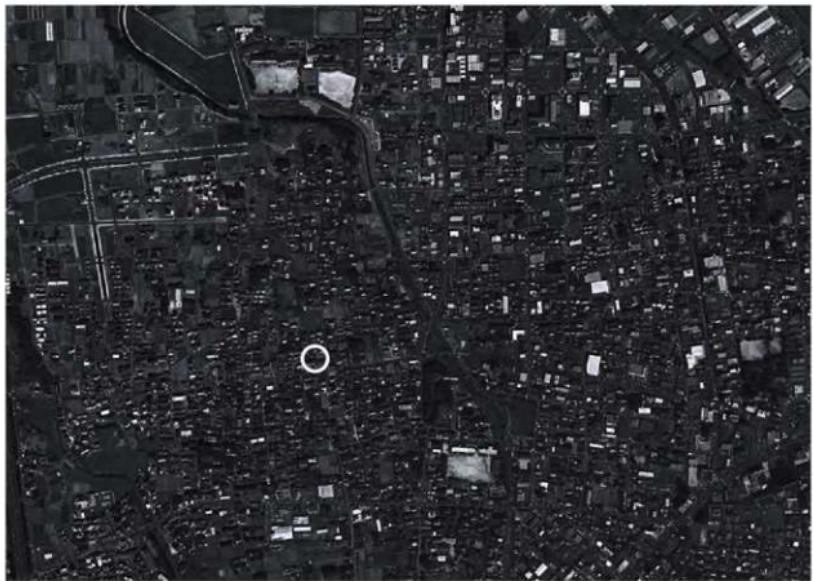


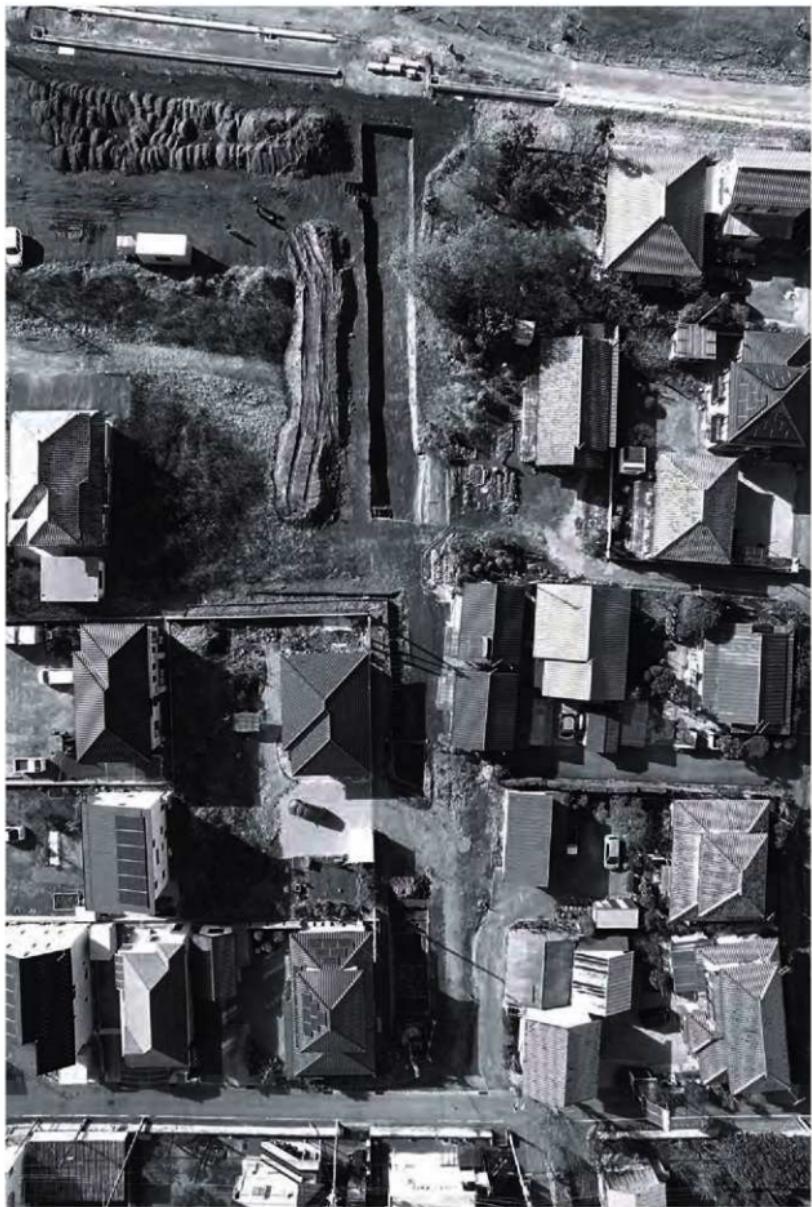
Fig.12 出土遺物



遺跡の位置 (2011年撮影 上が北)



遺跡周辺の現状 (米軍撮影 USA-R1250-109 上が北)



調査区全景（上北西）



W-1号溝全景（東から）



W-1号溝全景中段部全景（東から）



W-1号溝全景中段部全景（西から）



中央調査区全景（東から）



W-5号溝全景（東から）



東端調査区全景（上が北）



東端調査区全景（西から）



W-2号溝全景 (南西から)



W-2号溝全景 (南から)



W-2号溝A-A' (南西から)



W-3号溝全景 (南から)



W-3号溝A-A' (南から)



W-4号溝全景 (南から)



ピット群西侧全景 (北から)



ピット群東側全景 (北から)



W-5-1



-



造構外-1 (1/6)



|



|



造構外-2 (1/6)

報告書抄録

カタカナ	モトソウジャオウミイセキグン (138)
書名	元総社蒼海遺跡群 (138)
副書名	前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	-
シリーズ名	-
シリーズ番号	-
編著者名	前田和昭・茂木佑輔
編集機関	技研コンサル株式会社
編集機関所在地	〒371-0031 群馬県前橋市下小出町1丁目15番地3
発行機関	前橋市教育委員会
発行機関所在地	〒371-0853 群馬県前橋市総社町3丁目11番地4
発行年月日	2020年3月27日

フリガナ	フリガナ	コード	位置		調査期間	調査面積	調査原因	
			市町村	遺跡番号				
元総社蒼海遺跡群 (138)	前橋市元総社町 2137-1、2140、 2144、2145-1、 2150-1、2152、 2153-1、2153-3	10201	I A249	36°23'8"	139°2'13"	2019.12.16 ~ 2020.01.06	702m ²	前橋都市計画事業 元総社蒼海土地区 画整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
元総社蒼海遺跡群 (138)	城郭 その他	奈良時代 平安時代 中世	溝 溝 堀 ピット	1条 1条 3条 37基	須恵器 五輪塔（地輪） 石臼	古代の緩斜方位地割に開達する溝、蒼海城二の丸南側と東側を区画する2条の堀、城に伴う建物跡（ピット群）

元総社蒼海遺跡群（138）

群馬県前橋市元総社蒼海遺跡区画整理事業に伴う周辺文化財発掘調査報告書

2020年3月16日 印刷

2020年3月27日 発行

発行

前橋市教育委員会文化財保護課
〒371-0853 群馬県前橋市能社町3丁目11番地4
TEL 027-280-6511

編集
印刷

技研コンサル株式会社
朝日印刷工業株式会社
